

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
第2号(2015年度) 2016年3月発行

大学教育センター・授業研究 (FD 研修) の記録

大学教育センター・授業研究（FD 研修）の記録

本学では、授業改革の一環として授業の可視化を目標のひとつに掲げ、昨年度より大学教育センターを中心に授業研究を実施している。今年度もこれを継続しつつ、さらなる充実と拡充に向かう。

この授業研究は、我が国において明治以来、特に初等・中等教育の現場で実践されてきた手法であり、教員の実践力向上に大いに寄与してきた。同様の科目を担当する教員同士にとどまらず、異なる科目の授業においても授業実践を交流させ、授業後の検討会などで批評を展開することによって授業者自らの課題をフィードバックするとともに、学修者の実態に関する認識も共有しつつ、授業実践自体を研究の俎上に載せていこうとするものである。そうすることによって、授業改善の方策の視界が開けてくることは、言を俟たない。

本年度に取り組んだ、この授業研究の実践記録をここに取り纏める。本学における広範な授業改善に少しでも資することが出来れば幸いである。

平成 27 年度 第 1 回授業研究会（第 1 回 FD 研修）

日時：7月9日（木）5限（16：20～17：50）

場所：01108 教室

授業担当者 Tang Warren 助教

授業科目名 TOEIC(I)

参加者：大塚、岡、中村、鶴崎、地主、竹盛、張、日暮、ローズ、米崎

TOEIC(I)の授業は、外国語科目の選択授業であり TOEIC の資格を目指す学生が受講する。この授業の目標は、「学生のリスニングとリーディング能力の向上及び TOEIC テストに向けてテスト方略（ストラテジー）を教えること」であり、TOEIC の目標スコアは 550 点から 700 点としている。

本日の授業の流れは、基本的には、テキストを用いて、TOEIC の問題を解いていく形式であるが、同時に TOEIC の問題を解くストラテジーを教えることも強調されていた。受講生の中には、



英語力が低い学生も含まれていたようであるが、基本的に学生のモチベーションは高いように思えた。授業言語はほとんどすべて英語であり、かつ配布プリントも英語で書かれているにもかかわらず、頑張っているという学生の姿勢がみられた。英語で進められる授業はおそらく当初、学生にとっては大変だったと推測されるが、本日の授業でその成果が表れ始めているように感じた。たとえば、教師の質問に学生は英語で返答していたし、学生は英語による授業に慣れていたし、英語で談笑する場面も見られた。

TOEIC の授業は下手をすると単調になりがちだが、タン助教の授業は、テンポがよく、iPad をうまく利用し、時にはペア活動も取り入れ、学生が受け身にならないような授業になるよう工夫されて



いた。TOEIC テストの問題を解くストラテジーは使用テキストにも書かれているが、それをさらにわかりやすく自分の言葉で言い換えるところが、ネイティブ教員ならではの授業であり、ネイティブ教員の強みを活かした授業であると感じた。またテキストの説明で特に強調したいところは iPad と電子ペンをうまく使うなど、まさに IT 機器を有効に利用した授業であった。

第1回授業研究検討会まとめ

日時：7月9日（木）18：00～

場所：学習支援室（1号館322号）

参加者：大塚、岡、中村、鶴崎、地主、竹盛、張、日暮、ローズ、米崎

大学教育センターの授業研究第1回として7月9日（木）5限目に行われたTOEIC(1)の授業の観察結果を巡って、授業に関する分析・討論会を実施し、授業者と観察者の間で同授業内容に関する討議が行われた。冒頭に、授業担当者から授業に関してコメントがあり、そのあと、参加者が自由に意見を述べる形で進めた。討議の様子を再現するため、主な論点を上げると以下ようになる。なお発言者の氏名は省略した。



授業者：この授業の目標は、英語力、とりわけ TOEIC のスコアをのぼしながら、同時に文法・語彙力を習得することである。テストの点数を上げつつ、学生の英語の動機づけもあげていくことが目標である。前期の授業の前半は、スピーキングに焦点をあてていたが、後半から文法・リーディングに焦点をあて、かつ、テストストラテジーを教えている。本日のような授業がいつもの形式である。進む範囲やスピードはいつもこの程度である。

観察者：授業言語がすべて英語である授業の成果が表れていた授業であったように思う。先生の質問（品詞を答える問題）に生徒が英語で答えているのが印象に残った。ネイティブの先生の強みを活かした授業に感じた。

観察者：英語による授業は共通教育科目の英語の授業でもなされているのか？ネイティブの先生だけか？

観察者：試みている教員はいる。しかし、共通教育科目の英語では学生の英語力やモチベーションの点で難しいのが事実である。

観察者：iPad の授業での使用の効果や可能性は大きいと感じた。

授業者：本日使っていたペンは電子ペンで、字は少し乱雑であったが、使いやすく、英語による授業

もこの iPad があるからできている。

観察者：学生の英語力の個人差はあると思うが、どう対応されているか？

授業者：英語力の差はあり、サポートが必要な学生もいる。学生は頑張ろうとしているが、この授業は必修ではないので、別の時間で指導したほうがいいのかと思う学生はいる。

観察者：他の共通教育科目の授業と比べて、心構えができていて学生が多い印象を持った。

授業者：この授業は選択授業なので、自分の意志で受けている学生が多い。

観察者：授業のテンポが少し早く、指示も十分ではないのではと印象を持ったが、授業後、中国人の学生に聞いたところ、彼らは理解していると言っていた。他の日本人に聞いても大体わかると言っていた。

観察者：日本人学生と中国人学生の態度や文化に違いがある。中国人の学生は問題を解いたら、次の問題をしている。日本人はできたら次に進まず待っていることが多い。少し中国人学生のいい影響を受けてほしいと思う。また一番奥に座っていた女子学生たちは、ノートに答えを書き、家で復習し、また自分で問題を解く方略を使っており、こういう学生は伸びる。

観察者：本日の学生の問題の正解率は何割くらいか？

授業者：5割のレベルだと考えている。

観察者：到達度レベルは妥当か？

授業者：5割でもいいと思っている。一番弱い学生は3割くらい。ただ、難易度とレベルをはっきり言わないと学生は勘違いしてしまうので、TOEICの難易度やレベルは言うようにしている。

観察者：先生の質問に対して返答した学生の声小さく、発音に自信がもてていない学生がいるように感じた。先生自身が発音のモデルを示し、練習をしたら、もう少し自信を持って発音するのでは。また自分自身も対策講座を持っているが、40分経過したあたりで学生の集中力は切れてしまう。先生の授業ではそれほど集中力を切らした学生は見られなかったが、私自身は英語が苦手なため、集中力が切れてしまった。

授業者：確かに声が小さい学生はいる。一緒に音読をするのはいいかもしれない。本日の授業でも授業の後半で新しいところに入ったが、最初に発音の音読をすればよかったかもしれない。

観察者：学生は集中して聴いていたように思うが、私は集中力が切れてしまった。

授業者：学生は大変だと思うが、前に進まないといけなないので、その兼ね合いが難しいと感じる。宿題を出し予習を学生自身がしないといけないとも感じる。授業では、気分転換なものを取り入れてもいいのだが、進度との兼ね合いが難しい。

観察者：自分自身も一般教養と専門の授業を担当している。英語も同じであると思うが、どこにターゲットを置くかが問題で、この授業ではターゲットが550点なら、そこに焦点を置かないと学生の英語力は伸びない。時間かけたら問題をとけるけど、スピードも必要で、時間制限をもうけないとTOEICでは点数が取れない。だからこういう授業のやり方は必要。もう一方で、授業の進め方という観点も必要。

授業者：授業内で学生相互の交流という点では今のTOEICの授業ではどう考えられているか？

授業者：LL教室では学生は自由に机を移動できるが、学生はいつも同じペアでやる。一方、スピーキング活動で、全体で話し合おうという單元もあるのだが、やりたいけど時間がない。テキスト自体の構成が、2時間あれば、十分スピーキング活動も入れられるが、1時間半ならカットしなければならない。TOEICテストはスピーキングがメインではなく、リスニングとリーディングが中心であるためどうしてもそちらのほうを中心になってしまう。しかし、個人的には少しスピーキングも入れたほうが良いと思っている。

観察者：授業の進め方という点でいえば、先生が説明しているとき、壁の方を向いて聞いている学生がみられた。教員が説明しているときは学生に教員を見させたほうが良いと思う。本日の授業で、英語力が低いと言われた学生が壁の方を向いていたのが気になった。

授業者：残念ながらLL教室には前にスクリーンがない。他の一般教室では、学生の表情で理解でき

るのだから。一つの解決法として、リアルタイムで学生が問題をできているかどうか自分の iPad で確認することができるアプリがあるので、それを利用することも考えている。

観察者：予習についてはどのような指示をされているか？

授業者：今日のような宿題を課している。半分くらいの学生がやってくる。ただ英語力が低い学生ほどやってこない傾向がある。

観察者：先生が説明された中で、すべての単語を理解できなくてもいい、想像して進めていけばいいという内容は、緊張を和らげるものでいいと思うのだが、一方でテクニックとして教えるのはいいことか？

授業者：実際のテストではいいと考える。実際、我々の日常の中の会話でも、すべてわかっているわけではない。わからない単語があっても文脈の中で想像し、答えていることはある。それも一つの訓練だと思う。日本人は 100%わからないと、次のところに行かない習慣があるので、そこを打破したいと考えている。

観察者：授業のいい点はたくさんあったように思う。学生が問題を解く前に、ストラテジーの説明があったのはよかったと思う。ただ、先生が使う用語やイディオムが少し難しいものがあったのではないかと思った。

授業者：(最後に一言として) 研究授業は必要だと思っている。今回の研究授業は自分自身の勉強になった。学生になった気持ちで自分自身の授業を振り返ることができいい勉強になったと思う。

平成 27 年度 第 2 回授業研究会 (第 2 回 FD 研修)

日時：11月4日(水) 2限 (10:40~12:10)

場所：01210 教室

授業担当者 竹盛浩二講師

授業科目名 日本語表現法 2

参加者：大塚、岡、趙、タン、津田、日暮、米崎

「日本語表現法 2」は、初年次共通教育としての「日本語表現法」を基礎とし、人間文化学部における専門科目の初歩段階に位置付くものである。後の専門科目や、卒業論文を視野に入れた、専門(この授業は、心理学科とメディア情報文化学科の学生が履修する)の入門科目として行う授業である。この授業で身につける表現法は、資料論文の読解と論文執筆の授業、あるいはディスカッションの授業など、この後の授業でさらに深められていくこととなる。

「日本語表現法 2」の授業では、作文を書く演習を通して、文章表現の「技能」を身につけていく。

大学の学習の基本であるレポートの執筆や論述型試験での解答など、自らの考えを文章で表現する技能を身につけていくのである。

あるテーマについて書かれた資料(文章)を収集し、それを理解し、要約した上で、それについての自分の意見を構築することが課題となる。その際、その文章は、整った文であること、整理された



文章構成であること、そして論理的な文章展開であることが要求される。

授業の具体的な到達目標は、以下の4段階において系統的に配置される。①整った文が書ける。②文章を計画的に構成できる。③資料となる文章を読んで自分の考察（要約・コメント）に活かすことができる。④自らの考えを適切な文章で表現できる。

具体的な活動として、今年度は、大きく次の3つを柱としている。①書評を書く。②メディア批評を書く。③企画書を書く、である。そのすべてに亘って必要なのは、「読解」から「要約」への文章技術であり、「要約」と表裏一体を成す「分析・考察力」である。これを磨くためのレッスンを、3本の柱の間を繋ぐかたちで構成し、授業計画は立てられている。

この度の授業は、読解から要約へのステップを終え、分析・考察し、それを書く、そういうレッスンを構想したものである。到達点として要領よく「書く」ことに導くために留意したこととして、三つのポイントがある。①素材は抵抗感のない内容とすること。具体的には「ことばと文化」を取り扱う。②自らの考えを裏付ける客観的な根拠（データ）があること。そのために、文化庁の「国語に関する調査」とその分析（新聞文化欄）資料や動画を用いる。③学生自分たちの実態をもって、自分の



こととして考察させる。「調査」と同じ項目に事前に回答させ、集計したデータをもって考察させる。

主題文を書かせ、それを核にして自らの考察あるいは意見をどのように表現するのか、構想させることとした。

学生の考察が画一的にならないように、授業の進め方において単線的な展開とせず、多様な考えが出てくるように、授業の雰囲気を保つことも心がけたのではあるが、これには異論もあるはずである。さて、どのような文章が、次回提出されるのであろうか。

第2回授業研究検討会まとめ

日時：11月4日（水）12：10～13時00

場所：学習支援室（1号館322号）

参加者：大塚、岡、タン、日暮、米崎

大学教育センターの授業研究第2回として11月4日（水）2限目に行われた日本語表現法2の授業の観察結果を巡って、授業に関する分析・討論会を実施し、授業者と観察者の間で同授業内容に関する討議が行われた。冒頭に、授業担当者から授業に関してコメントがあり、そのあと、参加者が自由に意見を述べる形で進めた。討議の様子を再現するため、主な論点を上げると以下のようになる。なお発言者の氏名は省略している。

授業者：この授業は、どちらかといえば文章を書けない学生に対して、書きやすくするためにどういう工夫をすれば書けるようになるかを狙いとした。今回は、ことば一般を論じると書けなくなるので、自分たちが使っていることばを客観化し、それを踏まえてということであれば書きやすいのではないかと考え、本日のような授業展開を行った。最後の文章表現では、すべてをカバーするのではなく、項目を絞って書くよう指示した。これは、逆に書きづらくさせることもあるが、こちらのほうが書きやすいのではないかと思い、そう指示した。

観察者：竹盛先生の授業は前回と今回で2回観察したが、前は少人数の授業で、今回は大人数の授業であった。大人数の学生を集中させ、うまくコントロールするのは難しいと感じた。後半は集中していたように思うが、最初は私語が多かったように思う。授業の狙いに関しては、最後は理解できたが、時間配分も含めて、はじめわかりにくかった。学生が作成した文章を使って、このあと展開が続くのだろうか。また文章を書かせているときに、個別の学生とのやり取りが見られたが、それを全体で共有するという形にしてはどうだろうか。

授業者：授業の狙い、ならびに机間巡視での個々の対応を全体で共有することに関しては、はじめに授業の狙いを学生にはっきり言うと、学生の書く中身が一定のパターンになりかねない懸念がある。一つの着地にならないような抑制も必要かと考えている。

観察者：確かに、書き方の指導をすると高校の国語のような授業になってしまう可能性はある。最終的に学生が書く力を付けるのが狙いであるのなら、今回の授業の展開も必要である。

授業者：一定の形式を教えることも大事だと考えるが、個々の多様な発想を尊重しながら、文章を書かせたいと考えている。

観察者：その場合、今日の最後に出された課題に対して学生が作成している個々の文章を使って、もう一度授業を組み立てるということも必要ではないだろうか。

授業者：確かに、再評価として様々な角度から取り上げることも可能である。

観察者：私語を防止するために何らかの工夫はあるか。

授業者：指定席にすることも可能。

観察者：指定席にしたほうが私語は少ないことは事実である。

観察者：名前と顔を一致させない限り、私語は続く。指定席でなくても顔と名前を覚え、注意するときは名前で指摘すると学生は私語をしなくなる傾向がある。また学生間でディスカッションをさせるのも効果的である。ディスカッション後にグループごとの意見を聞くという形式はさらに効果的がある。

授業者：学生同士の活発な活動の中で、私語をなくさせることが重要である。私語をなくさせるためには、怒鳴ればなくなるであろうが、それはよくないと思っている。

観察者：授業中、集中していない学生も、いったん書き始めると、書けているのは感心した。

観察者：動画や映像が効果的に使われていたように思う。学生はスクリーンに映し出されると顔を上げていた。私語は確かにあったが、興味深い内容には食いついてきていた。これまでの授業は文章を読んで書くというパターンが多かったように思えるが、今回の授業は文章だけでなく、映像、画像というインプットがあり、学生の記憶に残った展開であったように思う。

観察者：先生が長く説明すると私語が出てくる。そこの兼ね合いをどうするか。たとえば、今回の授業では、グラフの読み取りを学生自身にやらせたり、学生自分のことばで説明させるのも一つの工夫かと思った。

観察者：今回の教材や資料は先生のオリジナルか。

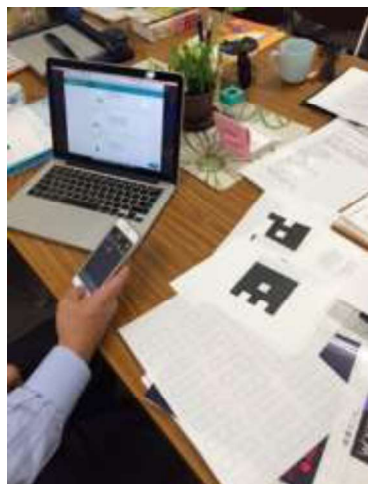
授業者：もともとは新聞記事であるが、図表などは組み直している。

観察者：毎回どういう基準でどういうねらいで題材を選択しているか。

授業者：新聞論評を中心に選び、要点を踏まえて自分の意見を書けるような題材を選んでいる。書くにあたって学生が興味のあるような要素を選び、かつ、書くだけでなく、読んで、データの読み取りがあるような要素が含まれているものを選ぶようにしている。これらの要素が含まれているものは、学生の食いつきがいい。ことばに関する教材はどの学科でも食いつきがいい。

観察者：今回の授業の狙いとして、学生自分の考えを出すようにと言われたが、たとえば、こういう場合ことばに困るとか、各自のケースを紹介しながらお互い刺激し合うというのはいいのではないかと思った。へたすれば正しいことばを使いましょうで終わってしまう恐れがある。

授業者：先生がおっしゃったことを踏まえながら、自分の主張を書けばベストである。したがって、ある程度書かなくてはいけない分量の用紙を配布している。教材に関していえば、ことばを見つめる



というような教材は、日本語表現法というコンセプトであるが、どの学科においても同じように食いついてくる。ことばに関する教材はそういうメリットがある。

※なお、授業後の批評会の後、授業に用いるツール（アプリ：Plickers）について教員間で個別に情報交換をすることが出来たようである。研修のために授業を提示し、批評会で相互批評を行うだけではなくて、それを機に授業技術などの様々な交流があることは、授業研究の成果でもある。

平成 27 年度 第 3 回授業研究会（第 3 回 FD 研修）

日時：11 月 27 日（金）5 限（16：20～17：50）

場所：27 号館 ICT 教室（CLAFT）

授業担当者 津田将行講師

授業科目名：キャリアデザインⅡ

参加者：大塚、岡、竹盛、前田、Tang、Lowes、日暮、米崎

「キャリアデザインⅡ」は、共通教育科目のキャリア教育科目の選択科目である。キャリア教育科目には、キャリアデザインⅠ、キャリアデザインⅡ、キャリアデザインⅢ、キャリアデザインⅣ、インターンシップⅠおよびインターンシップⅡの 6 科目があり、各科目の単位はすべて 1 単位である。

キャリアデザインⅡの到達目標は、福山大学教育プログラムの 2 年次目標である「対話」をキーワードとして、①飛び込む力(挑戦する力)、②考える力、③会話する力の 3 つの力の習得である。各回の授業では、それぞれ異なる人とグループとなり、コミュニケーションワークを実践することで 3 つの力の習得を目指している。

今回の授業では、①コミュニケーションワーク、②考える力の重要性、③「問題を見つける力」を養う、および④リフレクションペーパーの作成である。①コミュニケーションワークでは、人材育成で実施されている「ペーパータワー」の作成を通じて、体と頭を動かしながら、グループごとに目標達成へのプロセスおよびディスカッションによる振り返りを行うことで、仕事で重要な要



素である「チームワーク(協調性、リーダーシップ)」の体得を目指した。また③「問題を見つける力」を養うにおいても、グループ内で一人ひとりが身近な事柄に関する問題や疑問、大学生活に関する問題や疑問を列挙させ、また可能な限りその問題や疑問に関する回答を出させる形式で講義を進めた。本授業では授業進行が単調とならないように、主としてグループワークを実施する形式とし、学生が個々の主体性を持って、そして学生間で学生自ら回答を導き出す能動的な授業進行を心掛けた。

第3回授業研究検討会まとめ

日時：11月27日(金) 18:00~18時50

場所：学習支援室(1号館322号)

参加者：大塚、岡、竹盛、Tang、Lowes、日暮、米崎

大学教育センターの授業研究第3回として11月27日(金)5限目に行われたキャリアデザインⅡの授業の観察結果を巡って、授業に関する分析・討論会を実施し、授業者と観察者の間で同授業内容に関する討議が行われた。冒頭に、授業担当者から授業に関してコメントがあり、そのあと、参加者が自由に意見を述べる形で進めた。討議の様子を再現するため、主な論点を挙げると以下のようになる。なお発言者の氏名は省略している。

授業者：このキャリアデザインという授業の年次目標は、1年生で「自律」、2年生で「対話」、3年生で「社会参加」、4年生で「自己実現」と設定しており、今年度は「対話」をキーワードとして授業を展開している。この授業では3つの力、「飛び込む力」「考える力」「会話する力」を設定し、アクティブ・ラーニング型の授業で学生が主となり学生通しが対話をすることで、この3つの力を身につけることを狙いとしている。

観察者：教材は津田先生のオリジナルか？

授業者：教科書Ⅰ～Ⅳはあるが使用していない。「対話」というテーマで行っているので、オリジナルで実施している。今回のペーパータワーは企業が企業研修でよく使用する教材であり、知らない者同士が対話をし、完成させていくというのがねらいである。この授業のグループではないが、コミュニケーションができていたグループは高い塔が完成していた。

観察者：リーダーはグループ内で自由に決めたのか。

授業者：グループ内で自由に決めさせた。学部で固まらないように、各グループのメンバーはこちらで割り振った。

観察者：リーダーになることの強制がなく、学生が安心して授業にとりくめる雰囲気があったように思う。

観察者：各学生が確実に参加していたように思う。

観察者：前期の大人数の授業では、学生は確実に参加していたか。

授業者：積極的な学生もいればそうでない学生もいた。今回のような少人数では、少人数ならではの独特の雰囲気が見られることは事実だ。

観察者：学生たちはキャリアデザインの価値や意義を感じているか。

授業者：そうあってほしい。

観察者：配布プリントにある「頭のよさ」と「考える力」のグラフであるが、このようなマトリックスで提示できるものであろうかと思った。また「正解主義」「修正主義」というのは適切な言葉であるか疑問に思った。オリジナルの教材を使用されているということだったが、教材の内容に関して、どれくらい検討されたのか教えていただきたい。

授業者：他の先生の言葉を引用させていただいたので、適切かどうかということまで検討は不十分であった。

授業者：「問題を見つける力」に関して、普段当たり前と考えている出来事で、「気になる」「面白そう」「どうしてだろう」というようなものをあげるという活動があったが、「面白そう」は適切であろうか。たとえば「困っていること」といった言葉のほうが問題を見つける力の内容になるのではないだろうか。

授業者：興味を示してほしいという思いで「面白そう」という言葉を使った。

観察者：「気になる」「おもしろそう」「どうしてだろう」と学生が考える内容は、グループ内では話させたがその後、全体での扱いがなかったように思うが。

授業者：それぞれのグループ間で問題を出し、話し合わせたので、今日のところはそこまでにとどめた。

観察者：グループ間の対話の中で、学生の話話を聞いているとばらつきがあり、この「気になる」「おもしろそう」「どうしてだろう」の枠組みの妥当性にも関わってくるように感じた。

授業者：学生が対話をする、口頭で考えを表現できるようにすることが目的である。自分にはない視点で他の学生が問題をあげており、それが認識されればと思った。ある学生はこういう考えを持っているんだと認識してほしかった。

観察者：いつも同じ学生がリーダーにならないため、くじ引きなどで、役割をあててみるといいかもしれない。

観察者：役割をタスクごとに変えても面白いかもしれない。

観察者：タスク（ペーパータワーを作る、気になる出来事に意見を出す等）通しのつながりが見えてこなかったが、二つのタスク、その間に挟む先生の講義は何かつながりがあった設定されたのか。

観察者：タスク間のつながりと同じ視点で、最後に書かせたリフレクションペーパーの中で、3ポイントすべて書かせるのは大変だと思うが、何を書いてくれればよしとするのか。

授業者：本日の振り返りとして、活動やグループ間の対話の中で、何か思ったことを自分なりのことばでもう一度書くことがポイントである。その際、一言二言ではなく、ある程度の量で書いてほしいと思う。タスクのつながりに関しては、たとえば、ペーパータワーを作ることは失敗に終わったが、何が問題であったか、その問題点を見つけることにつなげ、さらにその問題点は、別の視点から問題はなかったということを考えさせたかった。

観察者：その問題点というのはコミュニケーション不足ということを理解してもらいたかったのだろうか。

授業者：コミュニケーション不足とチームワーク不足だと考える。ペーパーワークの作業をさせたとき、うまくいったチームは、それぞれの役割がグループ内にできていた。もう片方のチームは、振り返りの時間に作業をしていた。

観察者：社会とのつながりがキーワードなので、（ペーパータワーを作る作業で）「各企業の研修で使われている作業」と先生が一言言うだけでも学生に刺激をもたらせ、社会との結びつきの効果があったのではないかと思った。ビジネス書も教材の中で引用されることはあるか。

授業者：できるだけ引用していき、学生向けの資料を考えている。

観察者：最後の企業訪問のアナウンスがあったが、詳細を話していただきたい。

授業者：今回は、企業の人と対話することがねらいである。どんなことをしている企業であるか事前学習で調べさせ、企業の人と話をするために、事前に質問をすることを考えさせておく。そして実際企業の人と質問を含め、対話をし、最後にレポートを書かせる。企業の人にも見学するのではなく、質問しに行きますよと話している。

平成27年度 第4回授業研究会（第4回 FD研修）

日時：12月11日（金）4限（14：40～16：10）

場所：1号館01203教室

授業担当者 大塚豊教授

授業科目名：教育制度論

参加者：岡、竹盛、小野、津田、前田、日暮、米崎

この科目は教職を目指して教育制度について学ぼうとする学生諸君、および教育制度とは何かについて理解を深めたい諸君を対象に、「教育職員免許法施行規則」の「教育の基礎理論に関する科目」の1つとして、教育に関する社会的、制度的又は経営的事項に関する事柄を学ぶことを目指すものである。とくに、日本の教育関係諸法規や典型的な判例についての基礎的な知識を修得することを通して、学校において生じる可能性の高い事件、事故等に対して、教師として、また家庭人、社会人として適切・的確な判断・選択を行うことができるようになることをねらいとしている。15回の授業では、学校教育と子ども・保護者の権利、教育権論争と学習指導要領の法的拘束力、学校における平等と法、学校教育における信教の自由・政教分離、学校事故、学校における体罰、児童・生徒への懲戒、学校と児童虐待防止法、学校教育と情報法制、教職員の違法行為などのテーマを取り上げている。今回の授業では、そのうちの問題行動を起こした児童・生徒に対する指導や懲戒について考えることにした。

また、近年の大学教授法改革においてパラダイム変換として「反転授業」が一部でもはやされている。すなわち、授業内容を予めLMS（学習管理システム、本学ではセレッソ）を利用して受講生に公開しておき、事前準備学習が十分に行われることを前提として、実際の授業でのアクティブな学びを実現しようというものである。本授業では、きわめて初歩的な取り組みであるが、そうした「反転授業」の要素を取り入れようとしている。



第4回授業研究検討会まとめ

日時：12月11日（金）16：20～17：20

場所：学習支援室（1号館322号）

参加者：大塚、岡、竹盛、前田、日暮、米崎

大学教育センターの授業研究第4回として12月11日（金）4限目に行われた「教育制度論」の授業の観察結果を巡って、授業に関する分析・討論会を実施し、授業者と観察者の間で同授業内容に関する討議が行われた。冒頭に、授業担当者から授業に関してコメントがあり、そのあと、参加者が自由に意見を述べる形で進めた。討議の様子を再現するため、主な論点を挙げると以下ようになる。なお発言者の氏名は省略している。

授業者：この授業は上記の説明にもあるように、教職を目指す学生を主たる対象に、教育に関する社会的、制度的、経営的事項に関する事項を学ぶことを目的としている。本日のテーマは児童・生徒への懲戒と法であった。授業の形態に関して、去年は時間の前半に学生に発表をさせ、自分も別途作成したパワーポイント資料を用いて解説する形式だったが、時間が倍近くかかり、必要事項を十分に解説する時間が取れなかった。そこで、今年は初めに指定討論方式に変えた。つまり、あらかじめ担当することを指定された学生が代表して、内容に関する質問をし、私がコメントをする方式に変えた。しかし、学生は最初のページだけしか読んでいないような質問、数分の準備でできる程度の質問しかやってこなかった。これは良くないと考え、セレッソが導入されたこともあり、反転授業というほどではないが、事前に、その日の時間に教授する内容のパワーポイントや資料をセレッソ上に載せるようにし、学生各自が事前に資料をダウンロードし、印刷して目を通すようにした。それでも全く準備しない学生もいる。放っておけば教科書もない、配布資料もない、だから聞きもしないという学生も出てくる。そういう場合は、手元に余分に資料があるときは配布せざるをえないし、注意もする。本日は公開授業だからといって特別なことをするのではなく、普段通りの授業を公開した。

観察者：授業中、よく質問している学生がいて印象的だったが、教職を目指している学生か。

授業者：全体で質問をしてくれる学生は4、5名おり、その中でも絶えず質問をする学生が2、3名いる。

観察者：本日質問をした学生はポイントをついた質問をしてくれたように思うが。

授業者：確かに、こちらが気づかない質問をしてくれたように思う。

観察者：今回の授業では大人数の授業で、学生が参加出来る授業づくりを学ぶことができた。

授業者：一人1回は授業で発表するようになっている。スライドを読むだけの学生もいるが、中にはわからない用語をインターネットで調べてくる学生もいる。正直我々にとっては講義形式の方が楽であるが、少しでも学生に参加させることを試みており、それが大変難しい。しかし、講義形式では、寝ているだけの学生もいるので、そこを少しでも変えなくてはいけないと考えている。

観察者：センターの授業研究のシリーズでは講義式の授業は初めてで、学生が調べて発表する箇所と教員が解説する箇所のバランスも必要だと思う。

授業者：確かに、この授業は教員採用試験にも関わってくる内容であるため、学生が知っておかなくてはいけない知識や情報があり、それはきちんと伝えなくてはいけない部分もある。学生の発表だけに任せておくだけでなく、こちらからも説明しなくてはいけない。

観察者：講義形式の大人数の授業の中でも学生をいかに参加させるかということも学べた。配布プリント一つとっても、学生が発表した内容を書かせるよう工夫されていたり、先生が学生に質問を投げかけたりと端々に工夫が見られたように思う。意見が出なかった場合、隣同士でまずコメントを言わせ意見を出させるような工夫もある。

授業者：階段状の座席でグループ討議を行うのが物理的に難しい面はあるが、前後で今のことに関して議論しみようという形式をとっていることもある。また、資料の中で穴埋めをしているのは、居眠り防止のためもあるが、ポイントや注意を喚起するためである。

観察者：座席指定をされているのか。

授業者：50名を超えると座席指定をした方がいい。座席指定にすると私語は格段に減った。発表は座席とは関係なく興味あるテーマを選んだ者同士が、グループとなった。同じ学科が結局同じグループになることが多かったが、中には学科を超えてグループとなっている場合もある。

観察者：脱落する学生はいるか？

授業者：教職をとる学生は大事な一群であるので、これをなんとか引っ張っていくよう工夫していく必要がある。

観察者：この授業は発表形式であるので授業を通して、プレゼンのレッスンを積んでいくということになるのでは。

授業者：パワーポイントの画面を読むだけの学生もいるが、発表者は少なくとも一度は読んできているように思う。まずは、そこから始めていくことが大事だと考える。

観察者：オープンクエスチョンが多かったように思う。答えが出なかった場合あるいは、参加する場が温まるまでは、クローズクエスチョンから始めてはどうか。アクティブ・ラーニングの手法を取り入れられていたが、最後の5分、本日の授業で自分の中で何が勉強になったか振り返らせる時間を取り、書かせることでアウトプットに結びつくかもしれない。かなりの学生がセレッソに載せた資料が未読だったという報告があったが、できるだけたくさんの授業でセレッソを使うようにしないと定着できない。大学教育センターの授業ではセレッソを定着させるような取り組みをしていってはどうだろうか。

授業者：事前のアクセス数が少ないのは、資料を友達の間までダウンロードして配っているようだ。振り返りの時間を取るためにセレッソの活用をするのもいいかもしれない。小テストの活用も行っている。セレッソを早い時期に閲覧している学生はしっかり評価していこうと思う。

観察者：授業前に、小テストを終了させておくという方法もある。

授業者：紙ベースの小テストでは、学生が、どこが間違っているかチェックできるという利点がある。

観察者：セレッソの機能もエクセルで落とせば、成績一覧は可能である。

観察者：昨年セレッソ上で小テストを実施したが、相談しながら行っていた。公正性がない場合もある。

授業者：小テストなどにセレッソを積極的にあえて使っていない理由は、平等性という点で問題があるためである。セレッソを使える状態、つまりスマホやiPadを全員持っていないといけない。

観察者：この授業では学校教育法制度の根幹の部分を学生は学ばなくてはいけないので、学生にとっては難しく大変なのは。

授業者：確かに、密度の濃い内容を教えていかななくてはいけない。

観察者：本日の授業で、学生がスライドを読んだ部分は先生が説明し、学生同士でその内容について話し合わせ、疑問点などを挙げさせる授業スタイルはどうか。

授業者：当初、指定討論方式でそのような形にしたのだが、学生の中で疑問点をあげられない。だから今のようなスタイルにして、学生に読ませるという方式に変えた。

観察者：本日の授業内容は学生自身が歩んできた内容、問題であるはずだが、学生にそれを客観視させて理解させるのは大変難しい。

授業者：難しい専門用語を飛ばして、面白おかしくいえば学生の受けはいいだろうが、それでは学生は知識を身につけられない。学生のレベルに落として話すということは、学生に対して失礼と考える。それよりも難しい言葉を言い変えとか、背景知識を与えて理解させることが大学の授業だと思っている。

観察者：本日の授業は学生が身近に感じられる部分と大学レベルの内容を組み合わせる工夫が見られた。

観察者：学生の実態を学ぶのに大変参考になった。

授業者：アクティブ・ラーニング手法を取り入れるのには、規模の限界を感じる。

観察者：日頃私語が多いと言われていたが、私語をしている学生がほとんどいないと思った。比較的熱心にやっていたと思った。学部によるが、1年生では、発表をしたことがない学生も多いため、今後の発表練習だと思えば、発表は頑張っていたと思う。